Bulletin of the Educational Research and Development, Faculty of Education, Kagoshima University
2008, Special Issue No.4, 47-58

論 文

離島・僻地における音楽教育の研究

日吉　武

A Study of Music Education in Isolated Islands and Districts

HIYOSHI Takeshi

1．はじめに

筆者は、平成19年度、三大学（長崎大学、鹿児島大学、琉球大学）連携事業「三大学の連携による離島・僻地校での教科指導力向上のための教育課程の編成」の一環として長崎大学と喜界島（鹿児島県喜界町）への訪問調査を行った。また喜界島の鹿児島県立K高等学校が取り組んでいる文部科学省事業「新時代に対応した高等学校改革推進事業」において合唱を題材とした研究授業を行うことができた。

本研究の中心は、2007年11月に行った喜界島への訪問である。今回の喜界島への訪問は次の三点の目的をもって行った。

・喜界地域の音楽教育についての研究のための訪問調査
・喜界地域中高合同研究授業への講師としての参加
・喜界地域小中高合同音楽発表会への来賓としての参加及び講評

本研究はこれらの調査、研究の成果をまとめ、離島における音楽教育について考察したものである。

2．離島・僻地における教育の特徴と音楽教育活動

離島・僻地における教育の特徴について、八田明夫は複式学級での教科指導に関する研究を通して次のことをあげている。[*1]

・学年別指導案と同単元指導案があること。
・間接指導と直接指導があること。
・「ずらし」「渡り」という技法があること。
・ガイド学習、ペア学習という授業形態が見られること。
・合同学習、集合学習、交流学習という学習形態が見られること。

これらの特徴を音楽科教育に対応させると、まず音楽科では同単元指導案が有効であると言える。特に音楽科の小学校学習指導要領は二学年ずつで括られた記述となっており、二学年合同の指導計画を立てやすい構造である。また合同学習や集合学習、交流学習は合唱や合奏など多人数での音楽教育活動を組織するのに有効である。

同単元指導案で行われる音楽科の授業では、間接指導の場面や「ずらし」「渡り」という技法の使用、ガイド学習、ペア学習という授業形態の頻度は多くはないと思われる。しかし、学年別指導の授業形態の中で児童が高めた間接指導時の主体的学習の力やガイド学習、ペア学習を充実させる力、そして教師の「ずらし」「渡り」の技法の向上は、音楽科の授業でも十分活かされるものだろう。

例えば表現の授業で個別練習が行われる場合、教師が一人の児童に関わっている時は他の児童は自習の状態になる。そのような時には間接指導時の主体的学習の力が発揮されるはずである。また、授業でグループ別学習を取り入れた時には、ガイド学習の力量が発揮されると思われる。さらにグループ別学習で教師が巡回して指導する場合、それは「ずらし」や「渡り」の場面と捉えることもできよう。教師の技法が発揮される場面と言うことができる。

以上のような複式学級教育の特徴を踏まえた上で、音楽教育に関する調査・研究を進めた。

3．小学校における音楽教育

（1）長崎大学附属小学校訪問調査について

長崎大学附属小学校では一般教室で行われた1，2年生の音楽の複式授業を参観した。

複式ＡＢ型の授業で、この時間は器楽活動が中心であった。教科書は1，2年のものを両方二冊持っていた。授業参観から気付いた点をあげると次のようになる。

①教師の発問に対しては、どうしても2年生の発言が多くなっていた。自分たちの演奏の録音を聴いた感想も2年生が3名述べたのに対し、1年生は1名に止まった。
②1年生は鈴、2年生は鍵盤ハーモニカを担当したので、途中で学年別に分かれて練習する場面が見られた。

①の特徴については、八田も指摘している。八田はこの特徴を「1年だけでは聞けない意見を聞いて、1年生なりの考えを持てる。2年生には、自分の考えをノートに書いてから発表させるなどの手立てが必要で、1年の児童の考えを2年が聴く姿勢も育てる」[*2]というように課題と利点の両方を含むものとして捉えているが、まさにその通りと言える場面であった。

②の特徴は同内容指導の中にあって一種の学年別指導の場面と言えるものであった。教師は1年と2年、それぞれのグループを交互に指導しており、これは小規模な「ずらし」と「渡り」と言うこともできよう。教師が離れたグループは間接指導になるわけであり、リーダー役の児童が活躍してガイド学習が展開されていた。同内容指導が中心の音楽科の授業ではあるが、その中で学年別指導、グループ学習、ガイド学習の場面が生じることが普通に起こるということを実感した場面であった。

（2）喜界町立Ｋ小学校訪問調査について

Ｋ小学校は児童数38名、職員数10名、学級数4学級の小学校である。4学級のうち、1，2年生と5，6年生が複式学級である。

音楽室で行われた1，2年生の音楽の複式授業を参観した。

授業の概要は次のようなものであった。

○授業の概要
- ・授業の形式　1，2年生における腹式ＡＢ型の授業
- ・児童数　1年生：男子2名，女子2名
  2年生：女子2名
- ・本時の教材　今月の歌「ぼくのひこうき」「北風小僧の寒太郎」
  主教材「おちば」
- ・授業の流れ　①今月の歌を二曲斉唱する歌唱活動
  ②「おちば」を斉唱する活動活動
  ③「おちば」を鍵盤ハーモニカで演奏する器楽活動
  ④「おちば」を歌唱と鍵盤ハーモニカで合わせて演奏（教師のピアノ伴奏つき）

授業参観から気付いた点をあげると次のようになる。

○個人指導の充実の可能性は非常に大きい。少人数教育の良さを感じた。
○教師が子供一人一人を見取れる。
○２年生がリードして１年生の一部を誘い一緒に練習する、合わせてみるという場面が見られた。リーダー性が育っていることを感じた。
●児童が６人でも、教師がそのうちの一人にかかりきりになると他の５人の指導はどうしても手が回らず自習となる。
●隊形は６人が横一列であった。工夫の余地があると感じた。
●タンギング、息づかいの指導が必要。歌唱指導と兼ねた息づかいの指導の可能性、必要性を強く感じた。
●発声指導の必要性を感じた。

複式学級は当然少人数なので、教師の目が届きやすくなることによる個別指導の充実など、少人数教育の良さ、可能性は十分に感じられた。また二年生のリーダーシップには目を見はるものがあった。ガイド学習で培われたリーダー性が十分に発揮されていると言える。しかし、このような良さを生かすものはやはり教師の指導力であるということも強く感じた。個別指導の時間配分、隊形の工夫、技能に関する指導力等、教師の力量が向上すれば、さらにすばらしい授業になることは明らかであった。

参観後行った意見交換で指導助言を求められたので、次の二点を助言した。

・先生はもっと褒めた方がよい、ということ。ちょっとした活動の後には、必ず一つ褒める心がけが必要である。褒めることは児童をのせるチャンスにつながる。
・要求ばかりでは児童が苦しくなる。褒めることと関係するが、褒めて繰り返すことで教育効果が高まる。

また、学校長からはＫ小学校の音楽教育の特色として次のような点があげられた。

○Ｋ小学校の音楽教育の特色
・音楽も含め複式授業はリーダー性を育てるのによい。小学校でも２年生になるとしっかりとリーダー性が出てくる。
・一ヶ月に一、二回、月曜日に音楽集会を行っている。
・今月の歌を設定し、帰りの会でも歌う取り組みをしている。
・地域、保護者とも連携し、三味線・島唄の学習活動や、歌って踊れる「八月踊り」を実施している。地域の文化を伝承する、という目的も兼ねて行っている。

音楽集会は合同学習の形態にあたり、また地域、保護者との連携は一種の交流学習と捉えることができるだろう。少人数という学校規模もあり、地域、保護者、学校の距離（実際の距離だけでなく心の距離も含め）が近いことを強く感じた。音楽が地域、保護者、児童、教師をつなぐ柱の一つとなる可能性が大いにあるということである。学校全体の教育活動を深めるためにも音楽の指導内容の充実が肝要である。

最後には「やはり音楽において生の演奏は違う。ぜひ離島の子にも生の演奏を。」という要望も出された。音楽の専門技能を持つ教員（小中高大を含めて）の力量発揮が求められる課題である。

（３）喜界町立Ｓ小学校訪問調査について

小中高合同音楽会へ向けた体育館での全員練習を参観、指導した。全校児童65名による全員合唱である。練習曲目は「翼をください」（変ロ長調）であった。

まず、隊形と一、二番の歌い分けに工夫が見られた。

○隊形　1，2年生　最後列2列（舞台上）
　　3，4年生　前2列　右3年生　左4年生
　　5，6年生　3，4列目　右5年生　左6年生

○歌い分け
　一番　1，2年生　主旋律の歌唱と手話
　　3，4年生　主旋律の歌唱
　　5，6年生　二部合唱の部分（曲の後半）は副旋律（アルトパート）
　二番　1，2年生　主旋律の歌唱
　　3，4年生　主旋律の歌唱
　　5，6年生　手話と歌唱、二部合唱の部分は副旋律

音楽会の本番前日でもあるので、主に発声方法と表現をより豊かにするための手立てを中心に課題を考えながら参観した。課題としては次のようなものが考えられた。

●S小学校全員合唱の課題
・地声で前に歌いすぎ。
・歌声が落ちているので音程も下がる。
・ハーモニーがでにくい。
・表情が暗く、歌声に明るさが足らない。気持ちが堅い。
・手話の仕方も中途半端。特に上級生は一生懸命やってはいるが、もう一つ真剣さが足らない。手つきが甘い。

参観途中で指導助言を求められたので、3，4年生の二部合唱部分（主旋律）が下につられていることを指摘した。しかし、この点については、指導する教師の歌声がピアノの音より若干低かったので、児童たちは先生の歌声に合わせてしまい、結局主旋律を最初とれなかったということが観察された。児童はピアノよりも先生の歌声を聴いて反応しているということがわかった。

そこで指導者の歌声を使った指導が有効と考え、次のような指導を与えた。

○S小学校全員合唱へ与えた指導
・口の中をもう少し開けること。
・笑顔で歌うこと。もっとにっこにこで。
・足を開きすぎないこと。
・南無南無のポーズで声をまとめることを指導。これは非常に効果があった。
・指導者（男性）が裏声で旋律を歌うことで音程とひびきが格段によくなった。やはり指導者の歌声による指導が有効。
・ピアノでハーモニーを聴かせた。明るい響きであることを感得させた。
・あごをあげている児童がいたので、あごを少し引くよう指導。
・歌声は斜め上に歌うよう意識させた。バスケットのシュートをイメージさせた。
・体育館の二階の手すりくらいに歌うよう助言。
　手すりの向こう側にシュート、10点だ、のノリ。
・5，6年生に手話の手をもっと気持ちをこめてしっかりするよう指導。最後の「いきたい」の部分の人差し指の指さしを真剣にするよう指導した。その後は他の部分もよくなった。

・曲の最後の「いきたい～」の歌い方を指導。ディクレッシェンドが早すぎると指摘。最後の「い」をしっかり歌ってから自然に少しだけ弱まるように助言。歌って見本を示した。効果はよく出た。
・気持ちを届けるよう助言。歌は気持ちだ、と指導。

指導助言を与えるたびに歌声が改善し、豊かな響きが出るようになった。児童たちも自分たちの変化を感じてうれしそうな表情をしていた。

ただし、指導の課題としては次の二点をあげることができる。

●指導の課題
・３～６年生には指導ができたが、１，２年生に有効な指導・助言を与えることがなかった。短時間（約20分間）で６学年すべてに均等に指導することに難しさがある。
・３，４年生の歌声が改善し、響きがでてきたとき、５，６年生も改善したがその分音程があがり（つまり正確になり）、その結果上のパートにつられる児童がでた。時間の関係で修正の指導がしきれなかった。

Ｓ小学校の児童たちは皆明るく積極的で、また素直であった。そのため指導の成果がすぐ現れ、結果大変有効な練習時間をもつことができた。児童は十分な力を持っているのであり、与える指導によってその力を発揮させ歌唱力を伸ばすことができる、ということを確信した。

４．中高合同音楽科研究授業について

文部科学省事業「新時代に対応した高等学校改革推進事業」に基づき「Ｋ高校　喜界地域連携型中高一貫教育」の研究の一つとして、合唱を題材とした研究授業を鹿児島県立Ｋ高等学校の音楽室で行った。

研究授業における指導内容は次のようなものであった。

○発声に関する指導内容
・姿勢についての指導（足の幅、背筋等）
・口の中の開き方の指導（のどぼとけ、口蓋垂等）
・呼吸の仕方の指導（鼻から吸うこと、トトロをイメージすること等）
・歌声の方向性についての指導（サッカーのスローインでバスケットのスリーポイントシュートのイメージ、南無南無のポーズ等）
・ピアノの伸音ペダルで響きの質を確認。
○歌唱、合唱についての指導内容
・パート練習の実施。発声練習で獲得した歌声で歌うよう指導。
・発音よりもまずは歌声を良くしていくよう指導。
・ハーモニーが決まると、より響きが広がることを実感させる指導。

発声に関する指導では、生徒の歌声を改善することができた。上記した発声指導は効果が出ていた。またピアノの伸音ペダルで歌声の響きの質を確認した活動では、生徒も自分たちの歌声の変化に納得した様子がよく見られた。

反省としては次の二点をあげることができる。

・歌詞の発音指導がしきれなかった。
・生徒の意欲を維持する観点から強い指導をさけたため、音を取りきれていなかったアルトパートについてそのままで授業を進めた。

研究授業後の参観者（中学校音楽科教員、高等学校教員）との協議では、次のようなやりとりがあった。

○研究協議の内容
参観者：発声の指導で大切な点は何か。
指導者：特に大事なのは口の前でなく、口の中を大きく広げさせるということである。また歌声の方向性を意識させることも大切である。
参観者：本時の展開のポイントは何か。
指導者：展開初期における生徒の様子とその歌唱力の観察から、生徒の歌声の質を向上させることを主たる目標とした。その成果は授業の中で見られたと思う。ただパートで音が取りきれていなかったり、英語の発音については指導しきれなかった。本時の反省点である。
参観者：歌声が変わったのはよくわかった。発音については確かに指導が難しい。発音ばかりにこだわりすぎると歌唱指導としての魅力が薄れることもある。本時は十分歌唱指導として充実していた。
参観者：合唱指導のポイントは何か。
指導者：まずは発声を改善すること。発声がよくなれば歌声もよくなるし、歌っていて楽しく感じるようになる。また指導者がわかりやすい喩えを提示し、発声について難しく感じさせないということも大切だと考えている。そして生徒が努力したら、効果が現れたら、すかさず褒めることが肝要である。

研究授業では、生徒がイメージしやすい生徒にとって具体的な喩えや指導法を教師が工夫することで、技能の向上につながることを確認できた。特に少人数であれば、個別指導、個々への声かけも充実でき、それだけ指導の効果をあげることになる。離島、僻地における教育のヒントを得ることができた研究授業であった。

5．小中高合同音楽発表会について

（1）発表会の概要について

喜界町の小中高合同音楽発表会は平成19年度で32回目を数える行事である。喜界町総合体育館を会場とし、喜界町教育委員会と喜界町小・中・高音楽部会の主催で、喜界町の全小・中・高等学校が参加して開かれる。

発表の時間は入退場を含めて５分となっており、各校はその中で合唱や合奏の発表を１曲か２曲行っている。また吹奏楽部のある中学校と高等学校計３校の合同バンドによる演奏、そして全体合唱も行われている。

聴衆は保護者の他、一般町民、各学校の教職員等であり、体育館の半分を使って設置した座席はほぼ満席の状態であった。

音楽部会では、この音楽会のための準備や当日の取り組みを含め計６回の研究活動を設定し研修に努めている。研修内容には教科・領域等に関わる内容も取り上げており、鑑賞や器楽の指導方法についての研修等も行っている。それらの成果を集約する場が音楽発表会という位置づけになっているのである。

（2）三校合同演奏のリハーサルについて

小中高合同音楽発表会の前日、会場設営とともに行われた三校合同演奏のリハーサルを参観、指導した。

三校合同演奏とは、喜界町内で吹奏楽部のあるＤ中学校、Ｈ中学校、Ｋ高等学校の三校が合同バンドを作り、吹奏楽の演奏を行う取り組みである。今年度の演奏曲は「Bassman's Holiday」「星条旗よ永遠なれ」の二曲。指揮は中学校の音楽科教員と高等学校の音楽科教員が務め、また「Bassman's Holiday」には別の中学校音楽科教員がテューバソロで参加した。

リハーサルは、高校生の指導のもと中学生も協力しての会場設営から始まり、基礎練習の他、合同のパート練習を行い、最後に曲のリハーサルで締めくくられた。三校はこれまでそれぞれの練習の中で演奏曲に取り組んでおり、合同で練習するのはこのリハーサルが最初で最後であるということであった。生徒たちにとっても喜界町にとっても大変貴重な機会なのである。

練習の指導は高校の音楽科教員を中心に行われた。指導助言を求められたので、与えた指導とその成果は次のようなものであった。

○基礎練習における指導内容
- Ｂ♭の音で音の方向性、丁寧さをアドバイス。「ア」で発声させ、発声を改善した後の音色、音の伸び、響きの質は明らかによくなった。
- 強い音とていねいな吹き方を共存させるよう指導。そのために発声を改善させた。音のまとまりと伸びがよくなった。
- 全員に姿勢を指導。特に猫背を直すように指導した。具体的には胸を広げるよう（肩胛骨を付けるように）指導。姿勢が改善され、堂々と演奏できるようになり、音自体も広がりを持つようになった。

○パート練習における指導内容
- パーカッションに対して、音量をもう少しおさえるように指導。音色もていねいにするよう指導。具体的には、たたく面にもう少しバチを近づけて近い距離からていねいにたたくよう指導した。他の楽器、楽曲全体の中でのブレンド感が改善した。
- フルートの持ち方、右肘の高さを指導。音の伸び、発音がよくなった。

○演奏曲のリハーサルにおける指導内容
- 全員に、楽器に口を持って行くのでなく、口に楽器を持っていくように指導。格段に姿勢、構えた姿がよくなった。
- 聴き合うことの大切さを指示。音のまとまりがよくなった。

また指揮をされる高校と中学校の音楽科教員にも、指揮の面でたたきが強すぎることを指摘し、より自然な腕振りについて助言した。

生徒たちは、今年度初対面ということもあり、最初はとまどい気味であったが、指導者の指導やパート練習を通じて一体感が増した。それに伴いバンドとしての音のまとまりも改善していった。積極性には少し乏しさが見られたが、真面目に練習に取り組む前向きさは全員が持っていたので、着実に向上していく姿を見取ることができた。

（3）発表会当日の演奏について

喜界町総合体育館で開催された喜界町小中高合同音楽発表会に来賓として参加し、全演

奏を鑑賞、各校へ講評を書き、また全体講評を行った。

発表は、喜界町の全小中学校（小学校９校、中学校３校）の演奏と三校合同演奏、そして参加児童・生徒、聴衆を含めた全体合唱であった。

①発表内容について

学校の発表内容は、合唱が７（小学校４、中学校３）、合唱と合奏を合わせて行う合唱奏が３（すべて小学校）、合奏が３（すべて小学校）であった。この内、小学校１校が合唱と合奏の両方を一曲ずつ演奏していた。

②発表曲について

合唱の発表曲は、小学校が「Smile Again」「翼をください」「赤鬼と青鬼のタンゴ」「気球に乗ってどこまでも」「空を見上げて」、中学校が「With You Smile」「輝くために」「Let it be」であった。中学校の「Let it be」は英語の歌詞で歌われた。

合唱の発表曲は、いずれも現代の作品で、小中学生を対象として作曲された作品である。

合唱奏の発表曲は、「行きゅんにゃ加那」「喜界やよい島」「世界中の子どもたちが」であった。「行きゅんにゃ加那」「喜界やよい島」は伝統楽器を取り入れた歌と楽器演奏のアンサンブルということである。

合奏の発表曲は、「オブラディ・オブラダ」「小野津獅子太鼓」「明日があるさ」であった。ここにも伝統音楽である「小野津獅子太鼓」が取りあげられていた。他の二曲は小学生向けの合奏曲として編曲されたものである。

③発表学年と参加人数について

発表学年については、全学年参加の学校が小学校７校、中学校２校である。その他は、小学校が３～６年生で参加１校、４年生で参加１校、中学校が２年生で参加１校であった。

参加人数は最も少ない学校で小学校９名、中学校26名であった。逆に最も多いのは、小学校65名、中学校69名であった。児童・生徒数に大きなばらつきがあるのは、離島の教育環境ではやむを得ないことと思われる。

④講評の内容について

演奏は、それぞれに一生懸命取り組まれたもので、子どもたちも精一杯力を発揮しており、大変聴きごたえのある音楽会であった。

各校へ書いた講評の内容から、各校の演奏より捉えられる良かった点を整理してみると、次のようになる。

○良かった点

◇合唱

- 一生懸命気持ちをこめて歌っている姿勢がとてもすばらしい。皆の気持ちがよくそろったステージで気持ちよく聴くことができた。（小学校）
- 元気があり、歌詞に気持ちがこもった演奏でよかった。手拍子のパフォーマンスも大変よかった。（小学校）
- 歌も手話も心のこもった真剣な表現でとてもよかった。（小学校）
- 丁寧に歌おうというハートをとても感じさせてくれる好演だった。（小学校）
- 歌詞の言葉がよく聞こえ、意味がしっかり伝わってきた。（小学校）
- しっかりと遠く会場いっぱいに伸びる歌声で練習の成果がしっかり出ていた。（小学校）
- 高音の発声がよい方向性だった。（小学校）
- 気持ちをよくそろえたセリフと合唱で好感が持てるよい演奏だった。（中学校）
- 上に広がりを感じる発声で大変好感が持てた。柔らかく音楽をしようという気持

ちがとてもよい。（中学校）
・歌を届けようという姿勢が見えたよい演奏だった。（中学校）
・曲の音が高めの部分は音色が明るくよかった。（中学校）
・歌詞の広がりや気持ちの力強さ、大きさがよく伝わってきた。（中学校）
・歌詞の意味をよく感じ考えて表現しており立派だった。（中学校）
・歌詞の発音がとてもよく頑張れていてすばらしかった。（中学校）
・先生の指揮、ピアノ伴奏が大変よかった。（中学校）
・生徒の指揮、伴奏とも表現力があり豊かに音楽していたので立派。合唱にそれがよく伝わっていた。（中学校）

◇合唱奏
・伝統的な音楽に取り組んでいる姿が感動的だった。（小学校）
・リズムは生き生きと感じて演奏できていた。（小学校）
・縦のアンサンブルがよくそろい、気持ちを込めてしっかりと演奏している。（小学校）
・姿勢もしっかりしていた。従って楽器の音も歌声もしっかりと伸びてきた。（小学校）
・太鼓と三味線のアンサンブルもよく合わせようとしており、大変立派な演奏だった。（小学校）
・旗も使った、元気で気持ちのこもったパフォーマンスがよかった。合唱は各パートが一生懸命役割を果たしており、バランスのよい演奏で好感が持てた。（小学校）

◇合奏
・それぞれ自分の楽器、自分たちのパートに対して責任感を発揮して取り組んでいる。（小学校）
・リズムは大変そろっており、引き締まった立派な演奏。（小学校）
・気持ちのこもった太鼓の演奏がすばらしかった。皆がアンサンブルをそろえようとしているのがよく伝わってきた。伝統を大事にする心がよく伝わってきた。（小学校）
・それぞれのパートが生かしあえている、よくアンサンブルできた好演だった。各楽器を担当する児童の頑張りが感じられた。（小学校）

◇吹奏楽
・気持ちのまとまり、温かさを感じる音色で、練習よりずっと良い演奏になった。（Bassman's Holiday）
・バランスにもよく気を使えていて立派だった。（Bassman's Holiday）
・指揮、独奏を含めて息のあった感じがとてもよく感じられた好演だった。（Bassman's Holiday）
・出だしは落ち着いたテンポで出ることができた。（星条旗よ永遠なれ）
・途中速くなりそうでもぎりぎり踏みとどまったのが立派。（星条旗よ永遠なれ）
・良い意味で適度な緊張感、スリルのある演奏になっていた。（星条旗よ永遠なれ）
・金管やパーカッションもバランスをよく考え、丁寧にできていた。（星条旗よ永遠なれ）

・前日の練習での成果がよく出ていた。（星条旗よ永遠なれ）

一方、課題は次のような点があげられた。

●課題

◇合唱

・地声の強い発声なので響きが広がりにくくなっている。（小学校）
・力強く歌う感じはよいが、少し発声が崩れたのが惜しいところだった。（小学校）
・口の中の狭い発声なので音域が狭く高音があがりきらなかった。（小学校）
・途中少し速くなってしまうところが惜しかった。（小学校）
・「が」の発音はもう少し上にかかった鼻濁音になるとよい。（小学校）
・合唱の前半、少し音が低めの所の発声が暗く重いのが惜しい。（中学校）
・発声が響きの薄い平たいものになっていることが惜しい。（中学校）

◇合唱奏

・会場の大きさを意識し、それにあった発声を考えることが大切。（小学校）
・合唱で地声が強く上への響きがない発声なので、一生懸命歌っても音色が暗くなってしまう点が惜しい。（小学校）
・合奏はもっと遠くへ音を届ける気持ちが大切。少しこぢんまりした音楽になっていた。だからといって出せばよいわけではないので注意が必要。音色はよかったのだから。（小学校）

◇合奏

・もう少し主旋律を立て、皆がお互い聴き合いながら演奏できるようになるとよい。（小学校）
・打楽器のバランスがちょっと強すぎる。

上記の課題に対して与えた指導助言は次のようなものであった。

○指導助言の内容

◇合唱

・もっと口の中を広げるようにして、斜め上に向かう発声にすると、響きが広がりハーモニーももっと生まれてくる。また歌詞の発音も柔らかくなり、強弱をもっと豊かにつけられるようになる。（小学校）
・もう少し口の中を縦に広げるようにさせると、響きにまとまりが出てさらにきれいに歌えるようになる。（小学校）
・もう少し斜め前方に発声するだけでも距離感が出てさらに大きな表現になる。（小学校）
・高音の発声がよい方向性なので、その声を中音域にも降ろしてくるとよい。（小学校）
・伝統音楽という曲種では地声の強い発声もよいと思うが、もう少し声をまとめる意識があるとさらに伸びのある歌声になる。（小学校）
・「が」は「ナ」で歌わせると鼻濁音に直るので試してみてほしい。（小学校）
・発声指導の方向性はよいが、もっと口の中を広げ、母音の響きをそろえれば、さ

らに柔らかく広がりのある歌声になる。アの母音からさらに発音をみがいてほしい。（中学校）
・音が低く発声が暗く重くなってしまう場合、もう少し頭の後ろから上へ発声できると変わってくる。上唇をめくるようにして歌う練習も有効である。（中学校）
・合唱の姿勢は、もう少し足の間隔を狭くし、手は後ろで組まずリラックスした方がよい。（中学校）
・もっと口の中を縦に広げ、斜め上へ歌声を発するようにするとよい。頭の後ろから声がまわるように意識することが有効。（中学校）

◇合唱奏
・歌声はもう少し前に向かって距離感を持って発声するとよい。（小学校）
・姿勢をよくし、体全体を生かした歌い方ができるとよい。（小学校）
・もっと口の中を縦に広げ、おでこから発声するようにするとよい。（小学校）

◇合奏
・打楽器の音量バランスは今の半分くらいでよい。リコーダーや鍵盤ハーモニカのハーモニーを聴かせてから打楽器を入れる練習が有効。（小学校）
・途中のかけ声がもっと力強く言えるとさらに引き締まった演奏になる。（小学校）
・バチの使い方にさらに慣れ、手首の使い方等柔らかく工夫していくと、もっと音に伸びが出てくる。
・もう少し遠くへ音を届けるような演奏ができるとよい。

音楽会を鑑賞して言えることは、演奏へ臨む姿勢、心がまえ、音楽に積極的に取り組もうという関心・意欲・態度の面は教育がよくできているということである。また、歌や楽器の演奏に気持ちを込めることや歌詞をはっきりと発音すること、リズムを感じまわりとずれないように合わせること、まわりとよく合わせて合奏することなどはかなりよく取り組まれていた。さらに、島の伝統音楽に取り組んだ成果の発表もすばらしかった。大切な心を学ぶことにもなるのでぜひ続けてほしい取り組みであった。

課題をまとめると、合唱（歌唱）、合奏ともに技能面の指導の充実が不可欠である。発声の技能や歌詞表現の向上のための指導方法、各楽器の音色をよりよくするための指導助言の方法、合奏のバランスのとらえ方等、指導力の向上が児童・生徒の演奏にすぐに好影響を与えるであろう。

この音楽会は離島・僻地教育の特徴で言えば、合同学習、集合学習、交流学習という学習形態に当てはめることができるだろう。全小中高等学校が出演し、お互いの演奏を鑑賞し合ったり、合同でバンドを組織し演奏するという機会は少人数教育ではできないことをカバーするすばらしい教育活動である。そこで行われる学習活動、即ち表現活動や鑑賞活動には、少人数教育で培われた能力が集約され発揮されることになる。少人数における音楽授業の充実が合同音楽会での成果を高め、合同音楽会の充実、児童・生徒・教師が得る感動が音楽授業の向上につながっていく、そのような好循環に発展する可能性を持っている実践である。

6．まとめ

今年度の調査・研究から、まず複式授業における音楽科授業について捉えることができた成果と課題は次のようになる。（○が成果、●が課題）

○少人数教育の利点を活かし、個別指導の充実を図ることで児童の音楽能力を伸長させることができる。
○複式授業において主に学年別指導で行われる指導法（間接指導、「ずらし」「渡り」、ガイド学習・ペア学習）は同単元指導、同内容指導である音楽科の授業でも有効であると思われる。
●同単元指導、同内容指導であっても間接指導の場面が生じるので、主体的学習をいかにさせるか、音楽科におけるその指導法（個別指導の時間配分や間接指導に入る時の指示の仕方等）の研究が必要である。

また今回の喜界島での調査・研究から喜界島の音楽教育について成果と課題まとめると次のようになる。（○が成果、●が課題）

○多くの町民が聴衆として参加しておりすばらしい。
○音楽活動（表現、鑑賞とも）に取り組む姿勢、心意気、態度のよさがすばらしい。
（喜界町教育のよさを感じた。）
○リズムを合わせることの優秀さとアンサンブル力の高さがある。
○色々な学年がいっしょに活動するすばらしさが生かされており、教育の場としての可能性はさらにあると感じた。
○合同音楽会は離島・僻地教育における、合同学習、集合学習、交流学習という学習形態として大変有効である。
●歌唱の面では、発声の技能、歌声の出し方の質の向上が必要である。
●器楽の面では、音色をよくすること、よい音色を出すための奏法についての学習が必要である。
●合奏では、全体の中でそれぞれの楽器の音をもう少し聴き合うことが必要である。
●合唱も合奏も、もっと音に距離感を出してほしい。音は前だけでなく上にも響かせてほしい。

喜界島の音楽教育の調査・研究では、児童・生徒の音楽に対する関心・意欲・態度の教育は成果が大いにあがっていると見て取れた。今後は、異学年合同の教育について教材（選曲）や指導法の研究、また学年別指導で行われる指導法を音楽科の授業の中でどのように活用できるかについての研究を深め、授業や行事等の音楽活動における教師の指導力の向上を図る研究・実践活動につなげていきたいと考えている。

【注】

＊1　八田明夫「習熟度別指導に役立つ複式授業指導法の研究」，『新しい時代の要請に応える離島教育の革新　―長崎大・鹿児島大・琉球大　三大学共同研究から―』2007，71-80頁

＊2　同上，78頁